

平成二十三年度 入学試験問題（一次）

国語

（時間 五十分）

〔注意事項〕

- 一 試験開始の合図まで開けてはいけません。
- 二 受験番号・氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 三 試験問題は五題あります。問題がぬけていたり、印刷がはつきりしない場合は申し出なさい。
- 四 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 五 解答用紙だけを提出しなさい。

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 著述家になる。
- 2 一番の古株だ。
- 3 豊かな穀倉地帯をなす。
- 4 時間を確かめる。
- 5 貧しい生活を送る。

二 次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 ドビヨウから足が出る。
- 2 ボウカン用の上着を持つていく。
- 3 いくつかコウホを挙げる。
- 4 小麦をコナにする。
- 5 キビしくしつける。

「これはヤマメですか」

真一が若者の背後から聞いた。

「ニジマスだ」

若者は無愛想に^{こた}応えて林の斜面を下って行った。

やれやれ、と声を出して、積み上げた唐松に腰をおろした母の説明によれば、何を思ったのか、父が村はずれの川端にある養魚場に電話して、生きたままのニジマスを四十四匹頼んだのだという。そんなものどうするのさ、と母が問うと、沢に放して子供達につかみ取りをさせる、と応えた。なぜ、とさらに問い詰めると、あの子たちは魚取りの体験などないだろうから、とうるさそうに言ったのだという。

「だったら、どうして持つてく時間だとか、そういうことを相談してくれないんだいって怒ってやったのさ。昼には帰って来るだろうからって、オニギリ一杯作って待ってたのにさあ」

母の怒りの口調につられて、澄子が、すみません、と頭を下げた。春男君という若者は **A** 下に降りて行くし、子供達もオニギリを手にしたまま後を追っているの、仕方なく再び沢に降りてみることにした。

沢につくと、子供達はまず両手で水を掬って飲み、それからゴハン粒のついた手を洗った。

「密封されているのに、よく生きていますねえ」

真一が口のまわりをTシャツの袖で拭いながら質問した。

「酸素を入れてあるからな」

春男君はあっさり応えた。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

群馬県の山村で山崩れがあり、語り手の実家近くにある墓地が泥にうまってしまった。五月の連休に妻の澄子と息子である七歳の健二、十歳の真一とともに帰省し、林の中で墓地を移す作業をしている。

見知らぬ若者の運転する軽トラックが県道に止まったのは、健二が帰ろうぜ、とぐずり出したときだった。助手席にはザル一杯のオニギリと漬け物を持った母が乗っていた。

「ごころうさん。お昼だよ」

母が林に入るか入らないかのうちに、子供達はザルにとびつき、休み場所の木材置場に運んだ。

母のうしろをついてくる灰色の作業服を着た若者は、軽トラックの荷台から降ろしたビニール袋を肩に担いでいた。風船のように膨らんだ袋の中には、肩のところで折れ曲がったうしろの方に水が揺れており、魚が入っていた。

「養魚場の春男ちゃんだよ。父さんが頼んだ魚持ってきてくれたんだよ」

母のあまりにも簡単な紹介に、若者は、どこへ、と照れながら彼女を見た。母は、下の沢さ、とぶつきらほうに言った。

オニギリにかぶりついていた子供達は、魚を見ると口の中のゴハンを嘔まずに飲み込んだ。

「こらでいいかね、と言う春男君に、まあ適当に、と応えると、彼はビニール袋の口をほどき、砂でも撒くような仕草で溪流にニジマスを放した。さあ行くぞ、とでもいった放流の合図を期待していたらしい子供達は、ちよつとの間あつけに取られて流れ下るニジマスの群れを見つめていた。

「ヤバイぜ。流れて行っちゃうぜ」

健二の声に、真一もあわててズボンをまくり上げ、流れに入った。放流を終えた春男君は、つかみ取りの光景には興味がないらしく、ビニール袋をたたむと、それじゃ、と言って笹の路を登って行った。魚は好きかい、と、お礼の意味を込めて下から呼びかけると、春男君は前傾姿勢のまましばらく立ち止まり、はにかんだ赤ら顔の笑顔を一瞬だけ沢の方に向けてから、前よりも足早に登って行った。

子供達はニジマス相手のつかみ取りに思わぬ苦戦を強いられていた。春男君が放流した地点から三メートルほど下に岸の砂岩が水流でえぐられてできた小さな淵があった。上から見ると子供一人が辛うじて入れる小型のバスタブほどの淵のだが、手を入れてみると岸の下が思いのほか深くえぐれていた。ニジマスはその中に身を隠してしまつたのだ。

全身を濡らして頑張っていた彼らは、一匹の成果も上げられないまま、十分ほどして身震いしながら水から上がった。

「魚の体には触れるんだけど、逃げられちゃうんだよなあ」

めずらしく真一が興奮していた。

子供達の出た淵の中に入って見たのだが、大人の腕も岸のえぐれの

奥までは届かなかった。目で確認できないところを手先で探るのは気味の悪いもので、ときに魚体らしいぬめったものに触れるのだが、そのたびに腕を引いてしまった。指の先には緑色の苔だけがからみついていた。

「どうですか。魚は取れましたか」

麦ワラ帽子をかぶった母と、空になったザルを手にした澄子が降りてきた。

5 子供達の、だめだあ、の声を聞くと、母の優しい口調は一変した。

「あの爺さんの考えることはいつもそうなんだよ。思いつきばかりでさ。思いつき食って生きてきたようなもんさ」

母は深いため息をついてみせた。

ひとしきり、子供達からニジマスがつかみ取れない理由を聞いた母は、澄子の持っていたザルを真一に渡し、淵の流れ口に立てて構えるように言いつけた。真一は言われたとおり健二と二人でザルを淵に向けて流れの中に入れた。子供達の手配を終えた母から、ほれ、と顎をしゃくられて澄子とともに淵に入った。

「そこで足踏みしてみな、ほれ」

母の命令に従い、淵の中で足踏みすると、流線形の黒い影が数本、ザルの方に流れた。

「上げる」

子供達も母の命令に忠実にザルを抱え上げた。

ザルの中には二匹のニジマスが跳ねていた。母は鎌で笹を切ると、子供達の持ってきたニジマスのエラに通した。

景を見ておつな婆さんが泣いた。

母はやれやれというふうに関を掛けて肩を落とし、隣に座る澄子の方を見た。感受性を押し量るような母の視線から遠慮がちに目をそらして、澄子は助けを求めるような横顔を向けてきた。

9 「明日の朝はニジマスを釣りに行くぞ」

腹の底に力を入れて声を出した。

やったぜ、と健二が手を上げた。真一はもらい泣きをしていた。

翌朝、早く起きて子供達と硫黄沢に行った。古い竹の釣り竿二本と七号のヤマメ針は、夜、父が物置から出してきてくれたものだった。物ごころついてから、父が釣りをしている姿を見たことはなかった。釣りなんてやったのかい、と聞くと、ああ、とだけ応え、イクラを三つ付ければオモリはいらねえ、と言いついて寝てしまった。

早朝の硫黄沢は霧に覆われていて、深山の溪谷の様相を呈していた。背後でいきなりカッコウに鳴かれてとびついてきた健二は、腰のベルトをつかんだままびったりうしろに張り付いていた。朝露に濡れた笹路を下り、淵の上に出て、母が持たせてくれた売り物のイクラを針に付け、真一と二人で糸を垂らした。

橙色のイクラがまだ水底に沈まない内に、真一の糸が下流に走った。背から顔だけ出していた健二が、いけつ、と叫ぶと同時に真一は竿を抜き上げた。

昨日のザルの中のものよりはるかに激しく暴れるニジマスが釣り上げられた。母のやり方を真似て、笹を切つてエラに通し、健二に持たせた。

「うわあ、残酷」

健二の大袈裟な身ぶりに、食うんだよ、とだけ応え、母はまたザルを子供達に返した。

おなじことを七回繰り返して、十三匹のニジマスが取れた。

「これは魚取りじゃなくて、回収ね」

淵の中の足踏みにも飽きてきた頃、澄子が小さくささやいて舌を出した。

「四千円も払ってんだよ、四千円も」

澄子の声を聞きつけたのか、熱意の失せかけている者たちに母の叱咤がとんだ。

その夜の夕食のおかずはニジマスの塩焼とタラの芽の天ぶらになった。*おつな婆さんはタラの芽が初物だと言って、食べる前に山の方を向いて合掌した。それは何の意味ですか、と真一が聞くと、初物を食べる時、採れた地にお礼をしておくと、来年もまた山の神様が恵んでくれるのだ、と彼女は教えた。聞き耳を立てていた健二はすぐに真似をして合掌したが、真一は、迷信だな、と言ってゴハンを食べ始めた。

8 「ほら、孫たちが取ったニジマスだよ。みんな喜んでたよ」

母は父に塩焼を出すとき、精一杯の愛想をふりまき、ニジマスの回収方法に関しては何にも告げなかった。

父は弱々しい笑顔を子供達に向けた。母の言動の変化でつかみ取りが不成功だった事実が禁句であることを敏感に感じ取った彼らは、声をそろえて、ありがとう、と言った。老いた父が涙を見せ、その光

真一は岸に置いた瓶の中からイクラを出し、教えられたとおり針に三つ付けて再び糸を垂らした。糸が下流に流れ、竿がしなり、また釣れた。しびれをさらした健二が張り付いていた背から離れて、竿を取った。イクラを付け替えてやって健二に糸を垂らさせると、すぐに釣れた。岸に釣り上げたニジマスを彼は素早く両手で押え付けた。生まれて初めて自分の手で獲物を捕えた健二の横顔は、なぜかテレビを見つめる父の顔に似ていた。

唐松林に朝陽が射し、もれてきた光の線条が上昇を始めた霧の層を透して沢の水面に乱反射した。子供達は周囲で変化してゆく光の鮮やかさに B を奪われたのか、竿を肩に担いだまま呆然と沢の上流の方を見ていた。

「きれいだなあ」

健二が久しぶりに素直な言葉を口にした。

11 「硫黄沢の目覚めだね」

真一が静かに語りかけると、健二は急に頬を赤くして、気取るんじやねえよ、と兄の足に水をかけた。

朝、子供達は八匹のニジマスを釣った。

*おつな婆さん語り手の実家のすぐ上に住んでいるお婆さん。山崩れにより家が壊れてしまったため語り手の実家にいそろうしている。

*硫黄沢実家の墓から下に降りていったところにある沢の名前。

(南木 佳士『ニジマスを釣る』による)

問一 — 線部1「ぶつきらぼうに」3「あつけに取られて」10「しびれをさらした」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- 1 ぶつきらぼうに
- ア てみじかに
- イ そっけなく
- ウ 怒りをこめて
- エ かるんじるように

3 あつけに取られて

- ア 突然とつぜんのことにあわてて
- イ ものたりなさに気がぬけて
- ウ 想像以上のことに感心して
- エ 予想外のことにおどろいて

10 しびれをさらした

- ア 恐ろおそしさをわすれた
- イ あきて退屈たいくつしていた
- ウ うらやましく思っていた
- エ がまんができなくなつた

問五 — 線部4「思わぬ苦戦を強いられていた」とありますが、このことを具体的に述べた部分を文章中から十字以上十五字以内で抜き出し、その最初の三字を答えなさい。

問六 — 線部5「母の優しい口調は一変した」とありますが、この時の母の様子を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもたちにニジマスのつかみ取りをさせるといふ父の思いつきが失敗だったことを知って、父に対して腹立たしく思っている。
- イ 子どもたちがニジマスをつかまえられないのは、父が何の考えもなくニジマスを放流したためであると誤解し、怒りがこみ上げています。
- ウ 四千円もはらってニジマスを放したのにもかかわらず、一匹もつかまえない子どもたちに対し、ふがいなく思うとともに怒りを感じている。
- エ 都会育ちの子どもたちが、ニジマスをつかみ取ることなどできるはずがないことは何となくわかっていたが、それが現実のものとなりがっかりしている。

問二 A に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア そろそろ イ ぐいぐい
- ウ ずんずん エ めきめき

問三 B に入る体の一部を表すことばを漢字一字で答えなさい。

問四 — 線部2「澄子がく下げた」とありますが、このときの澄子を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母の言うように父が何の相談もなくニジマスを養魚場に頼んだのは身勝手な行いだと思い、父の代わりにあやまっている。
- イ 母に対する遠慮から父を弁護できずにいる自分を腹立たしく思いながらも、その場をおさめるためにあやまっている。
- ウ 自分の息子たちに対する父の気づかいがもとで母の怒りを買ってしまったので、思わずあやまっている。
- エ 食事を作ってくれた母の優しさや、父の思いやりに気づかなかつたことを素直にあやまっている。

問七 — 線部6「思いつき食って生きてきたようなもんさ」とありますが、これを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父は今までさまざまな困難じゅうなんに対応し、家族の生活を支えてきたということ。
- イ 父は家庭内ではえらそうに行動することが多く、母に迷惑めいわくをかけてきたということ。
- ウ 父は気まぐれな考えで、周囲の人間をまき込んで様々な問題を起こしてきたということ。
- エ 父は母に相談することなく行動することが多かったが、結果的にはそれが家族の結束を強めたということ。

問八 — 線部7「澄子がく出した」とありますが、この時の澄子の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母が何とかニジマスを取ろうとやっきになっている姿に浅ましさを感じ、いやげがさしている。
- イ 母が指揮をとることで子どもたちがニジマスを取ることができたことに、おどろき感心している。
- ウ 子どもたちに魚取りを楽しませるといふよりも、ひたすら効率を優先する母のやり方に疑問を感じている。
- エ 子どもたちに魚取りをさせるといふより、何とかしてニジマスを回収しようとする母の様子におかしみを感じている。

問九 — 線部8「母は告げなかった」とありますが、母がこのようにした理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父の子どもたちに対する思いやりの気持ちを尊重し、皆の前ではじをかかせないように心配りをしたから。
- イ 父の思いつきにふりまわされたことを告げないことで、父の威厳を保つように気をつかったから。
- ウ 子どもたちは魚を取ることができなかったが、なんとか夕食のおかずだけは確保できたことに安心したから。
- エ あえて父の涙をさそうようにふるまい、それに対する澄子の反応を観察しようと思っていたから。

問十 — 線部9「腹のく出した」とありますが、この時の語り手の様子を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母と澄子との関係に関わりたくないという意思を表している。
- イ しんみりとした夕食の雰囲気を変えようとしている。
- ウ 涙を流す父とおつな婆さんを元気づけようとしている。
- エ 子どもたちとニジマスを釣ることを楽しみにしている。

四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

1 西欧社会では、レトリックは二五〇〇年の歴史をもちます。紀元前からの伝統で、ソクラテス、プラトン、アリストテレスたちが活躍した古代ギリシア時代から続くものです。ふつうレトリックというとき、この西洋のレトリックを指します。

2 では、レトリックとは何を意味し、何を目的としたのでしょうか。当時のギリシアは、「共和制」といういちおう民主的な政治体制がしかれていました。いちおうというのは、奴隷制の上のつかった共和制だったからです。ですから完全な民主主義ではありません。でも、奴隷ではない市民には言論の自由がありました。そして、市民の代表は、自由に意見を述べることができて、議場での議論とその結果によって重要な方針が決められました。そこでは、いかに「よく話す」かが当然大きな意味をもつでしょう。

4 レトリックは、議場や裁判の場で、「よく話す」方法として開発され、それがしだいに体系化されていったものです。「よく話す」の「よく」とは、「説得力をもって」という意味です。つまり、レトリックとは「説得力」を意味したのです。腕力で人を負かすのではなく、ことばで人を説き伏せる、これがレトリックでした。きわめて実践的な意味をもっていました。

5 奪われたものは、取り返さなければなりません。「A」という力の行使ではなく、また、ただ泣き寝入りするのではなく、出るところ

問十一 — 線部11「健二はくかけた」とありますが、この時の健二の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 硫黄沢の神秘的な光の鮮やかさに感激していたが、その様子を兄がうまく言い表してしまいくやしく思う気持ち。
- イ 硫黄沢の朝の幻想的な風景に見とれていたが、兄のよけいな一言のせいで感動がうすれてしまい残念に思う気持ち。
- ウ 硫黄沢の夜明けの風景に感動したことが何となく照れくさく、兄に水をかけることでごまかしたいと思う気持ち。
- エ 硫黄沢の不思議な美しさに感動したが、兄に対する対抗心から感動したことを認めたくないと思う気持ち。

問十二 この文章について説明したものととして適当でないものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 健二は自分の気持ちを素直に表すことが苦手である。
- イ 真一は初対面の人ともおくせず話せる気さくな性格である。
- ウ 澄子は母に対していつも気をつかい精神的につかれている。
- エ 父は何でも思いつきで行動するわがままな人間である。
- オ 母は気が短く口も悪いが思いやりのある人がらである。
- カ 語り手は周りに気をつかいながら家族を優しく見守っている。

ろに出て正々堂々と自分の言い分を述べるのです。訴えや無実の罪に対して、身を守るために自己弁護をするので。さらには、何が正義で何が悪かを大勢の人を前にして演説するので。そのとき、ことなりゆきを左右したのは、「よく話す」ことでした。

6 C 説得術の術とは、技術を意味しました。つまり、体系だった方法のことです。

7 説得術としてのレトリックは、より広くは、「弁論術」と理解されました。人前で話すときは、いつでも相手を説得することを目的としているとはかぎらないからです。たとえば、英雄の死に対して申いたることを述べるのも、弁論の大切な一部でした。自由な発言が認められた社会では、なにかにつけて口頭による論、つまり弁論が重視されました(弁論の弁は弁護士の弁にも受け継がれています)。この弁論術の主軸が、説得術だったと考えていいでしょう。

8 この意味での弁論術は、今日の社会にも見られます。みなさんの学校のクラブに弁論部があるかもしれません。また、弁論大会があります。「青年の主張」という形の弁論もあれば、学校の屋上で学生がグラウンドの仲間に向かって声を張り上げるテレビ番組もあります。なかなかいじらしかったりして、ときに人を感動させます。「よく話す」ことができた証拠です。政治家のするような答弁よりも、うんとすがすがしいでしょう。

9 レトリックは、古代の哲学者のアリストテレスが『弁論術』で書いているように、どのようなテーマに対しても応用できる一般的な技術体系でした。ですから、私利私欲のために悪用する者もいました。た

しかにレトリックならぬトリックとして用いる者もいました。また、近年にいたつても、国民を大規模な戦争に向かわせる政治レトリックにも応用されました。この意味で、レトリックは両刃の剣です。説得力が悪い方向に暴走しないように、知性による見張りが必要なので

10 いまレトリックの説得面を見ましたが、レトリックにはもうひとつ大切な面があります。表現そのものの魅力です。レトリックといえ

11 ですから、日本のレトリックは、弁論術でも説得術でもなく、おもに詩歌を対象とした修辞学でした。ふつうの、並の、標準的な、**D**な表現に少し手を加えて、魅力的な表現を生む。こちらが中心でした。

12 このレトリックは、悪口の対象になりやすいという弱みがあります。ことを飾り立てるばかりで、実質的な内容が乏しいという批判です。とりわけ、現代のように、社会の中で文学のもつ力が落ちていく時代では、中身さえ伝わればそれでいいという風潮がいつそう強まるでしょう。

13 たしかにパソコンやケータイで伝えたい内容がやりとりされる社会では、必要なのは正しい情報とスピードでしょう。さらに、多くのデ

18 説得とペアになるのが納得です。あなたは説得しようとして、説得は得がうまくゆけば、相手は納得します。この納得は、考えると不思議なのですが、必ずしも論証や証明によってえられるとはかぎりません。むしろ、「ああなるほど」と思ったときに納得するのです。頭だけでわかるのでは不十分で、「**G**」といういわば身体的な理解が必要となるのです。

19 ですから、いま説得が必要なものは一〇〇パーセントの確証がえられないときだと述べましたが、ときには、疑いの余地のない真実であっても、よくことを尽くさないと人に伝わらないことがあります。真実が真実であるということを、説得力をもって語らなければならぬのです。「なんでこんなことがわかってもらえないんだ」と悔しい思いをしたことはありませんか。たとえば真実であっても、ことば不足の場合は、ことば巧みな不実な破れてしまいかねません。

20 また、人数の多さに押し切られて、自分で正しいと思つた考えが通らなかつたことはなかつたですか。「多勢に無勢」という状況です。そのようなとき、立ち上がって、自分の主張を述べるのは勇気のいることです。ふたたび破れるかもしれない。いつそう孤立するかもしれない。そのとき、唯一たよりになるのは、ことばです。よく選ばれた

14 しかし、魅力的な表現を求めるレトリックは、少し別なところに力点をおいています。つまり、魅力は、美文や装飾に直結するのではなく、「より適切な表現」を求めるからです。より適切な表現には、美しい表現も含まれるでしょう。でも、それだけではありません。ある表現がより適切になるには、文脈をよく考慮して、伝えたい意味が過不足なく表されていなくてはなりません。

15 そのためには、表現手段としての言語素材をよく知ることです。ことばにはどんな仕掛けが用意されていて、どれだけの潜在的な活力があるのかを知ることです。この点を明らかにするのが、レトリックのもうひとつの仕事なのです。そして、レトリックのこの面は、第一の面と矛盾しません。より適切な表現は、説得力と結びつくからです。この点は、広告コピーなどによく現れるでしょう。

16 こう考えれば、広い意味でのレトリックはつぎのように定義できます。レトリックとは、あらゆる話題に対して**E**で**F**技術体系である。

17 ここまで説得という表現が何度かでてきました。レトリックを考へるうえで重要なことばです。説得の意味をさらに知るには、論証との

21 このことばをまん中において、話し手と聞き手が面と向かいます。レトリックが必要となる場面では、厳密にはことばだけではなく、これら三つの要素が絡みます。どのような聞き手かということを知らなければなりません。好意的なのか、敵対的なのか。敵対的な場合は、それだけ下準備が必要です。また、話し手自身の評価はどうなのか。誠実な人の口からは誠実なことばが聞かれます。うそつきはなにを言つてもうそだと思われま

ことばを媒介にして伝わりま

*主軸中心となることばから。
*潜在的に表面には現れないが内にひそんで存在するようす。

問一

A・D・Gに入ることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|---------|----------|
| A | ア 目をぬすむ | イ 目の上のこぶ |
| ウ | 目には目を | エ 目に物言わす |
| D | ア 断定的 | イ 論理的 |
| ウ | 中立的 | エ 否定的 |
| G | ア 腑に落ちる | イ 腹を据える |
| ウ | 腰を折る | エ 肝に銘ずる |

問二 B に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア すなわち
- イ しかし
- ウ だから
- エ あるいは

問三 —— 線部2「泣き寝入りする」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不満をもちながらもあきらめる
- イ 反論しながら最後は納得する
- ウ 何も考えず相手の考えに同意する
- エ 不平も言わずに受け入れる

問四 —— 線部1「西洋のレトリック」とありますが、これについて説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 平等に話しあえる社会をつくるもの。
- イ 議論の相手をうまく説得するもの。
- ウ 哲学的な真実を明らかにするもの。
- エ 自然に関する理論をうちたてるもの。

問七 —— 線部4「レトリックは両刃の剣です」とありますが、筆者がこのように述べる理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア レトリックは有効であるが、そのことがレトリックにたよりすぎると欠点につながるから。
- イ レトリックは実践的な技術であるが、同時に適用範囲がせまいという欠点ももっているから。
- ウ レトリックは悪用されることがあり、正しく用いる場合にも相手に警戒されてしまうから。
- エ レトリックは応用のきく技術であり、不正に利用する際にもその効果を発揮してしまうから。

問八 —— 線部5「レトリックにはあります」とありますが、もうひとつの面が大切である理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 表現を魅力的にすることによって人々の感情に訴えることができるから。
- イ 表現の魅力を追求することはよりふさわしいことばを求めることにつながるから。
- ウ 表現を魅力的にしようとする態度は今までにはなかった新しい表現を生み出すから。
- エ 魅力ある表現で語ろうとすることにより相手を説得する必要がなくなるから。

問五 C に入る次の a～d の文を正しく並べかえ、記号で答えなさい。

- a 効果的だったからこそ、悪用もされたのです。
- b もちろん、当時も、白を黒と言いくるめるようなレトリックもなかったわけではありません。
- c しかし、説得術というと、悪くいえばだましのテクニクのように受けとられるかもしれません。
- d けれど、それは、本物のレトリックそのものが力をもっていた証拠です。

問六 —— 線部3「説得術としての理解されました」とありますが、弁論術と説得術との関係を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 弁論術にはいくつかの異なる種類のものが含まれるが、説得術はそのうちの一つである。
- イ 弁論術はことばを述べるためのすべての技術をさす、なかでも説得術こそが正統な弁論術である。
- ウ 弁論術は主張を相手に伝えるものだが、説得術は主張を相手に受け入れさせるものである。
- エ 弁論術は行事であいさつするときに役立つが、説得術は相手を説き伏せるときに有効である。

問九 —— 線部6「このレトリックはあります」とありますが、悪口の対象になりやすい理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 重要な情報でも、過度に装飾をほどこせば正しい情報ではなくなってしまうから。
- イ 表現の価値は伝わる内容によって決まり、表現のしかたでは決まらないから。
- ウ 伝わる内容が同じであれば、魅力的な表現は意味がないと思われてしまうから。
- エ 正確さが大切な文学表現では、表現のくふうは必要ないと思われてしまうから。

問十 E・F に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア E 美文や装飾
- イ E 説得力のあることば
- ウ E 適切なことばづかい
- エ E 魅力的なことば
- F 人を説得する
- F よく話す
- F 相手をまどわす
- F ていねいにお願する
- F 人を説得する

問十一 — 線部7「説得のいいでしょう」とありますが、説得と論証との違いを比べることによって明らかになる説得の意味を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

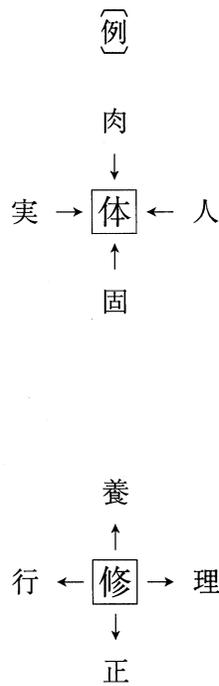
- ア 自分が納得していることなら相手を説得する必要はない。
- イ 説得によって相手に納得させた結論は真実とは限らない。
- ウ 論証できないことを説得により納得させることはできない。
- エ 説得により納得させられれば真実かどうかは問題ではない。

問十二 — 線部8「結局は伝わります」とありますが、この部分から読み取れる筆者の考えを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 説得の場面では聞き手や話し手である自分の分析と同じくらい、ことばの用い方が大切である。
- イ 相手を説得するときに結果に最も大きな影響をあたえるのは、ことばの組み立て方や選び方である。
- ウ レトリックが必要なのは相手が敵対的なときであり、その際ことばを尽くすことで説得が成功する。
- エ ことばこそ最も優れた意思伝達手段であり、人間はことばによってはじめて考えを相手に伝えられる。

五

次の1から5は例のように矢印の方向に従って読むとそれぞれ熟語を作ることができます。□に入る漢字一字を答えなさい。



問十三 この文章を内容からI〔1〕、II〔10〕、III〔17〕、IV〔21〕の三つに分けたとき、それぞれにつけた小題の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア I 説得術としてのレトリック
- II 魅力的な表現を求めるレトリック
- III ことばによる説得
- イ I 説得術としてのレトリック
- II 魅力的な表現の効果と問題点
- III 論証の魅力
- ウ I 西洋のレトリック
- II 日本語の特長と問題点
- III ことばによる説得
- エ I 西洋のレトリック
- II 日本のレトリック
- III 論証の魅力

